

真の学問を探究する姿勢

——シンポジウム「新世紀中国古代文学研究的回顧與反思」に参加して——

李 慶国

さる10月27日、28日の2日間にわたり、中国遼寧省大連市で『新世紀中国古代文学研究的回顧與反思』（遼寧師範大学文学院主催）というシンポジウム（学術研究会）が開催された。この学術討論会は「20世紀初頭10年間の中国古代文学研究の実績と問題点、新世紀の中国古代文学各時代の研究並びに作家作品研究の総合評価、中国古代文学研究の展望」の3つのテーマからなり、国内各大学や研究所などから105名の研究者が参加し、90本の論文と17篇の「論文摘要」が提出された。筆者は主催者の遼寧師範大学文学院で古典文学研究で活躍している中堅の張慶利教授の招きを忝くした。そこでこの10年間の中国古代文学の研究動向と課題及び問題について大変興味を持ち、最新の研究情報の収集やその課題に関連した論文を発表するために参加した。

この十年間余りの古代文学の各分野の研究を概括する論文がかなり多い。例えば、「新世紀」や「21世紀以来」という言葉をテーマの冒頭につけた、「古代文論」、「詠史懷古詩」、「劉向『列女伝』」、「魏晉南北朝文学」、「陸機生平」、「謝靈運詩賦」、「梁陳詩歌」、「唐詩」、「唐末詩歌」、「唐詩自注」、「唐宋詠史詩與元明清歷史小説創作關係」、「元代文学」等の研究論文が提出されていた。他に「総合研究」、「先秦兩漢・六朝文学」、「唐宋文学」、「元明清文学」など春秋戦国時代から近代までの古代文学でのさまざまな課題についての研究成果が披露された。その中に未開拓の分野や幅広い領域にまたがる意欲的な研究論文もあった。

27日、初日の開会式（遼寧師範大学永利学術報告ホール）では、遼寧師範大学文学院党書記于永順教授が司会を担当し、文学院院长王衛平教授が歓迎の辞を述べ、黒龍江省文学芸術聯合会主席傅道彬教授、陝西師範大学文学院院长張新科教授が祝辞を述べられた。その後、大会記念撮影と休憩。再開された大会で論文発表が行われた。第1セッションでは、張新科：「近十年来史記研究的新進展」、李洲良（ハルビン師範大学）：「詩具史筆」—「『詩』

亡然後『春秋』作」的文化解讀及其詩学批評」、劉剛（湖北襄陽湖北文理学院）：「21世紀以来宋玉研究的回顧與反思」、李立（深圳大学）：「漢代墓葬画像図像資料與漢代文学研究」、盧燕新（南開大学）：「新世紀唐詩總集研究的回顧與展望」が発表された。第2セッションでは、梁焄智（遼寧師範大学）：「周汝昌留下了什麼？」、趙輝（中南民族大学）：「『限定時空言說』與中国文学研究的新途径」、李定廣（上海師範大学）：「關於崔致遠研究的三個誤区」、方麗萍（青海師範大



中国古代文学研究シンポジウム会場にて

学)：「古代文学研究的『正』、『反』、『合』」が、そして筆者は「中日初高中語文教科書中的『古典』」を発表した。

その日の午後、大連の白玉山や旅順博物館、日露戦争の遺跡へ観光旅行が用意されていた。旅順博物館は中国国内外から集められた3万点以上(2012年9月版『地球の歩き方・大連、瀋陽、ハルビン』に「6万点」と書いているが、百度百科には「所蔵文物は3万点以上、国家の一級所蔵品は45点」となっている)の文物が所蔵されている。特に青銅器や玉器、近世以降の陶磁器、書画、新疆ウイグル地方やインドなど西域で出土した文物、日本の江戸から明治にかけての絵画、大連近郊の考古学的資料など特色ある収蔵品が多い。大谷光瑞(1876-1948、日本の宗教家、探検家、20世紀初頭京都西本願寺第22代住職)のコレクションや羅振玉(1866-1940、農学家、考古学家、教育家)のコレクションの一部などが博物館の主要な所蔵品となったという説がある。



旅順博物館

28日は分科会の形式で、参加者は三つの分科会(会場は仲夏花園ホテルの3つの会議室)に分かれて、一人およそ10分の持ち時間での発表であった。発表後、5分程度の質疑応答の時間が入る。中国での発表は、殆どの発表者の完全原稿が論文集(会議前に印刷された)として配布されるので、発表者の論文を見ながら、口頭発表を聞くのが一般的である。日本のようにレジュメだけの発表はほとんど見られない。分科会は三つの会場で同時に行われたが、私は第三組の会議に参加した。第三組の司会を務めたのは査洪徳教授(南開大学)と張曉琦研究員(黒竜江省社科院文学所)であった。お二人の先生は、時間分配もよく、発表と討論の進め方は見事なものであった。彼らのユニークでユーモアある話し方に日本に長く暮している私は感心した。分科会は総大会より面白く、興味深い論文発表があり、実り多き活発な議論が繰り広げられた。

第3組の発表者は十数人である。以下印象に残った論文の一、二を紹介してみる。

劉玉琚(西南交通大学)「中越民間文本與中国古代の俗文学研究」(「中国・ベトナムの民間写本と中国古代の俗文学研究について」)は、ベトナムには大量の漢籍民間写本が保存されていて、中国文人の作品が語り伝えられている間に通俗文学の演芸作品に変身した例も多く、写本としての演芸作品には原作と「喃文」(ベトナムの俗文字)の歌詞(講釈を含む)とが一緒に書き混ぜられているものがほとんどであるということが紹介された。これからそうした写本類の文献が多く発掘、整理され、そして緻密な研究が大いに進むことが期待されるだろう。②劉勇剛(遼寧師範大学)「論『文心雕龍』実践性的感覺力」(「『文心雕龍』の「創作力」について」)は中国古代文学批評理論の最高峰の『文心雕龍』が「言志と縁情」、「義理と意象」、「内容と形式」を上手に統一して、優れた「創作力」を示したモデルであると指摘した。また、学术界が拝金主義に巻き込まれ、研究者の「文人の素質」の欠如が問題視され、古代詩詞を批評する人が漢詩すら書けない現象が一般的であると慨嘆された。

③吳夏平（北京大学ポスドク）「從社会角色看唐代文館文士與文学之關係」（「社会的な役割から見た唐代文館文士と文学の關係」）は、「跨学科」の社会学の視点から、「問題の提起」、「文人の社会的役割」、「文人の共通性と文学」、「文人の官職・地域の移動と文学」など4つの側面に分けて唐代文人の所属、官職、社会地位などと文学創作の關係を論証した。④翟朋（南開大学博士、指導教官査洪徳教授）「新世紀十年元代文学研究新進展」（「21世紀10年間における元代文学研究の新動向」）は、大量の資料を調査したうえ、元代文学研究の状況と成果をしっかりとまとめた力作である。しかし問題点や海外の研究状況などの紹介がなされなかったことは惜しい。⑤田恩銘（吉林大学ポスドク）は「伝統的有効性與文学図譜的重構」（「伝統の有効性と文学史の書き方の再検討」）は、胡適『白話文学史』の文学史上の意義と伝統の有効性を分析し、また新しい資料、新しい方法、新しい観点を用いて文学史を書き直す必要性を提起した。⑥張曉琦『『金陵十二釵』考釈』は長年にわたって「詮索」で考証した成果を披露したものである。歴史の真相を「仮語村言」（謎々）に隠している『紅樓夢』を解説するには、「詮索」研究は有効に違いないと強調した。私は、総大会で既に発表した、分科会で司会の要請に応じて10分程度追加発表をした。日本の「漢文訓読法」や幾つの寓話、漢詩の異なる解説を例に挙げて紹介すると、参加者達が大変興味を持っていてさまざまな質問をしてくれた。私は古典文学の研究者ではなく、「訓読法」を少し知っている程度で自分の学力不足を痛感した。

午前中の分科会が終わると、午後には学会全体の閉会式があり、各分科会の司会（第1組、韓高年教授（西北師範大学）、曹勝高教授（東北師範大学）；第2組、趙望秦教授（陝西師範大学）、沈文凡教授（吉林大学）；第3組、査洪徳教授、張曉琦研究員がそれぞれ分科会での各組の論文発表や討論の様子を報告した。最後に遼寧師範大学文学院于永順教授が研討会の総まとめの発言をして閉幕した。

会議後、私は一日をのばして大学時代の友人と一緒に大連市の日本統治時代の遺跡や日本人の住宅街を回った。

このシンポジウムに参加して中国古代文学研究の現状を知り、古代文学研究の著名な学者傅道彬教授、張新科教授らと接し、特に傅先生と一緒にお酒を飲みながら雑談をすることができてとても良かったと思う。この会議は2日間で効率がよく、大きな成功を収めたと言ってもよい。ただ、あえて苦言を呈するならば、研究者が学問を追究する姿勢や「学風」の問題がある。一部の論文は、「学術論文」とは言いにくいものもある。曖昧な概念や中味のない「套話」（常套的な表現）などもよく使われる。おそらく、中国の古代文学研究の世界だけではなく、さまざまな学界でも、粗製濫造の懸念が実際にあるだろう。「拝金主義」に巻き込まれた学界にあっては落ち着いて着実に研究を進めることが難しいことがそうしたことの奥深い原因かもしれない。会議の二日間、いろいろな学者達と交流していたとき、彼ら自身が、今こそ、真の学問研究を探究することが重要であるという危機感を抱いているような感じがした。

最後に、開催校の代表を務められた張慶利教授を始めとする遼寧師範大学の先生方の細心かつ周到なご準備に心よりお礼申し上げたい。